

## 4) 社会学

社会学の研究活動が再開されて5年目にあたる1983年には、社会学専門誌「社会」が従来の季刊から隔月刊に改められ、また発表される研究業績の数も大幅に増加するなど、現在のところ中国の社会学は順調に発展している。

上記の「社会」は上海大学文学院(83.2期までは復旦大学分校)の編集による専門誌で、その内容は理論研究から応用社会学の諸領域、さらには学界動向に及ぶ多彩なものとなっている。同誌のほか、国内では「社会学通讯」「国外社会学参考資料」などが発行されている。

83年現在、社会学系(社会学部)を設置している大学は北京大学、復旦大学、中山大学であるが、これらのうち復旦大学は社会学系第1期の卒業生を2月に送り出し、そのほとんどは研究教育機関と行政部門に配属された。

### 理論社会学

理論研究の分野では、マルクス主義に立脚した独自の理論体系への模索が続けられている。鄭農「試論：社会学のマルクス主義的伝統」(「社会」83.3期)がその典型といえる。また「社会」83.1期においては、「マルクス逝去100周年記念」と題された小特集が企画されたほか、3月25日には上海市社会学会によって「マルクス逝去100周年を記念する座談会」が開催され、マルクス主義に基づく社会学の研究をいかにして展開するかについて話し合いが行われた。マルクス主義的 sociology 理論の確立——これが理論研究における当面の課題であろう。

さらに理論研究において注目されるのは、余英時らの見解である。彼は「毛沢東社会学思想の研究」(「社会科学战线」83.1期)において、毛沢東を「社会学者」として位置づけており、この前年に発表した大学の紀要論文では、毛沢東を政治社会学、经济社会学、人口社会学そして教育社会学の各領域に

わたる社会学研究者であったと評価している。

社会学史の方面では、従来あまり顧みられなかった解放前の社会学界に関する研究が活発に行われている。許妙発「旧中国の社会学団体」(「社会」83.4期)、陳福康「鄭振鋒と我が国初の社会学専門誌」(「社会」83.1期)など数多くの論文が発表された。また代表的な社会学史研究者である陳樹徳は「文匯報」83.2.28において、梁啓超の学会演説などを引用しつつ社会学の研究対象について論じている。

### 応用社会学

社会学の応用領域には力が注がれており、とくに社会諸問題の解明という実践的目標に対して社会学研究者は強い指向性を示している。

第1に老人問題への関心は高く、上海では社会学研究者を中心として「老年人問題研究会」が結成されている。この問題に関しては具体的報告も多く、福建省の事例を扱った倪小宇「老人互助会について」(「社会」83.1期)、国外の事件を取り上げた駱善「アメリカの老人犯罪」(「社会」83.5期)などがある。

一方、数量的に最も豊富な研究業績を有する分野は家族社会学である。83年の「社会」各号には前年に引き続いて「社会学講座：家族社会学」と題された記事が連載されているほか、論文も数多く発表されている。しかし黄友林「家族の本質とは何か」(「社会」83.5期)にみられるように、抽象的な認識論の展開にとどまっている場合も少なくない。ただしこの分野において実証的な業績が散見されるのは、婚姻の問題を扱った諸研究で、陳平「社会的条件の愛情と婚姻に対する影響」(「社会」83.5期)のほか、結婚適齢期にある男女の比率に関する動態的研究もみられる。また83年前半には、北京、上海など5都市において、住民の家庭状況に関する大規模な訪問調査が、社会科学院、復旦大学など多くの研究機関をあげて実施され、現在その結果の公表が待たれている。

50年代までの中国社会学には、農村研究の輝やかしいほどの伝統が存在し

た。しかし近年はそのような調査研究は行われず、農村社会学に関する論文もほとんど見かけなかった。83年になって、「社会」(83.4期)は現実の農村社会を扱った2編の論文を掲載した。上海近郊農村の経済的發展を紹介した瞿春榮「新農村のモデル」と、湖南省の農村部において清明節前後に多発する農民同士の紛争を報告した曾芳文「農村の墓地紛争の解決を重視しなければならない」である。とくに後者の論文は事象の具体的経緯を述べているだけに印象が深い。

都市社会学の分野では、上海市社会学会が「都市社会学研究部会」を組織したほか、「人民日報」83.4.13において、中国社会学会会長の費孝通は、地方都市の問題に関するインタビューに応じている。また都市の住宅問題については張仲「住宅問題と社会学」(「社会」83.4期)、孫金樓「古今東西の住宅問題」(「社会」83.1期)などがある。

教育社会学の研究としては、上記の費孝通を中心に中国民主同盟が学校教育、とくに中等教育に関する全国的な調査を実施したことがあげられる。

### 国外からの摂取

国外社会学の理論や方法の導入は、引き続き活発に行われている。文献や論文の翻訳・紹介ばかりではなく、日本やアメリカから研究者を短期講師として招聘することも始められた。

復旦大学は10月下旬に横浜市立大学教授の長尾演雄と大阪府立大学教授の野村哲也を招き、約3週間の集中講座を開設した。また北京大学では、スタンフォード大学教授で著名な理論研究者であるA. インケルスが約2週間の講義を行った。

一方、ニューヨーク州立大学教授の林南が主宰する「北アメリカ中国系社会学者協会」も、祖国社会学の発展に多大な貢献をしている。

国外社会学の導入は、あくまでもそれが有する「有効な」部分のみの吸収であり、いわば「批判的摂取」であるという原則については記すまでもない。

(田辺義明)